

# 「禁忌の掟」の罫を解く

2022/04/20



## ウクライナ支援のゴルフボール

ロータリー仲間に誘われて、今日、ゴルフに行きました。昨日までの天気予報は、「雨」「雨か曇り」でした。当日は、一足早い、五月晴れ。最高のゴルフでした。明るく、湿度が低く、風も爽やか、ウグイスの声が響き渡って、花水木の花がきれいでした。キャディーも若い女の子で、礼儀正しい頭の良い良い子でした。お昼の天麩羅蕎麦が美味しかった。長島カントリーは長島温泉が経営しているので食堂も美味しいです。スコアも良く、最高のゴルフでした。スタート前にパタ



一の練習をしていたら、ほかの組の人のボールがコロコロと転がってきました。ぼくのボールは黄色ですが。その方のボールは、なんと、青と黄色のツートンカラー。初めてみました。「ウクライナ応援のボールですね」と声を掛けたら、「アッ、ほんとですね。気がつきませんでした」とのことでした。

## オルトルートの復讐

土曜講座のローエングリンは第2回が終わり、いよいよ、次回(2022/05/07)は、魔女のオルトルートがエルザをだますところが始まります。相手が神がかりのローエングリんです。一介(いっかい:たんなる個人の資格)の魔女風情ではとても敵いません。しかし、嬉しいことに、エルザは人間です。「こいつをだまして味方に引き入れれば、まだ、望みはある」とオルトルートは踏んだのです。その通りです。それで、早速、エルザをだましに掛かります。オルトルートの復讐が始まります。

ローエングリンは、エルザ姫を助けるためにブラバント公国へやってくると直ぐに、エルザに向かって「禁忌」(きんき)を告げます。「禁忌」とは、文字通り「忌み嫌うこと」で、歌劇《ローエングリン》の場合、神さまが、神聖な立場を守るために、人間に禁じる事柄や言葉のことです。[\[ホームページ「一読百解 I :03/31物語の禁忌について」\]](#) ローエングリンの「禁忌」は、聖杯を守る騎士であることからの約束上、人間には、自らの素性を明らかに出来ないのです。そのことを「訊いてはならない」と強くエルザに命じたのです。ローエングリンは、エルザに厳しくいいます — 「あなたは、私に、決してたずねてはならない — 私がだれであるか、私がどこから来たか、私の素性はなんなのか、を」。これが、「禁忌」です。

## 禁忌の畏

それから、もう一つ、第2幕第5場(資料 27 頁)で、ハインリヒ王から、「魔法使いかどうか?」と訊かれたときに、ローエングリンはいいます — 「王の問いでさえも、私は応えなくても良いのだ。たとえ、この国の最高会議が尋ねても私は答えることはできない。みなさんは私の正しい行為をみたのだから疑念を抱いてはいけない。私が答えなければならないのはエルザだけだ」。そうなのです、この禁忌に対して訊ねることができ、それにローエングリンが答えなければならないのは、エルザだけなのです。じつは、これこそ、「禁忌の掟(おきて)」なのです。

でも、物語では、禁忌は必ず破られることが前提です。だれがこの掟を破るかといえば、禁忌を告げられた当の相手です。掟を課せられた当事者です。「それ以外には、ない」というのが禁忌の法則です。ここでは、裁判にかけられたエルザです。《オルフェオ》では、妻のエウリディーチェを失った夫のオルフェオです。「夕鶴」ではこれも妻を失った夫の与ひょうです。でも、この三人、エルザも、オルフェオも、与ひょうも、もし、禁忌を破れば相手を失って、元も子もありません。すべてを失うようなことを当の本人がするわけはありません。

でも、結局は、禁忌はその当事者によって破られるのですから、この矛盾を越えなければ話は進みません。これこそ、「禁忌の掟」の畏です。昔話や物語

の作者は、自らが掛けた「罨」に落ちてしまったのですから、困ってしまいます。これこそ、哲学者西田幾多郎がいう「絶対矛盾の自己同一」です。(笑)

## 凄腕刑事コロンボ

TVドラマ「コロンボ刑事」の人気一番の作品は「別れのワイン」です。そのお話はこうです

異母弟リックが所有するワイナリーの経営をまかされ、自分の気に入ったワイン作りにすべてを捧げるエイドリアン。お金が必要になったリックは、大手の酒造会社にワイナリーを売ると宣言。激高したエイドリアンはリックを殺します。リックの遺体が海から見つかり、刑事コロンボが担当します。エイドリアンが犯人だと目星をつけたコロンボは、ワインが犯罪を解く鍵だと思い、40年かけてワインの道を極めたワインショップのオヤジにワインのことを学びます。「ワインの善し悪しを見分ける秘訣はなにか？ それは価格だ」に始まります。「酸化したワインの味を当てられるのは、わたしのほか世界に数人しかいない」と聞いたコロンボは、その一人がエイドリアンであることに気づき、エイドリアンを罨に掛けます。

証拠の品は、高温にさらされて味が落ちたワインです。コロンボは、エイドリアンの保冷庫のワインが暑さのために全滅したのを知って、高級酒「フェレイラ・ヴィンテージ・ポート 45年物」を盗み出し、エイドリアン自らに鑑定させて、空調を切った保冷庫に弟を置き去りにして殺したことを白状させようというのです。でも、エイドリアンは自分が不利になることをいうわけはありません。でも、彼しか酸化したワインの味を当てられる人はいません。これも、「禁忌の掟」の罨です。さあ、この「絶対矛盾の自己同一」をコロンボ刑事は、いえ、作者はどう解くのでしょうか？

それでコロンボは、エイドリアンを秘書と一緒に一流レストランに招待して、盗んできた「フェレイラ・ヴィンテージ・ポート 45年物」を飲ませます。一口飲んだエイドリアンは怒り出します。店の支配人に、「ワインの管理がなっちゃいない。このワインは酸化している。コロンボさん、ここの料金は払う必要はありません」と店を出て行きます。

上手いものです。

最終幕。コロンボは護送する車の中でエイドリアンと二人だけの「別れの宴」を催します。

最高のデザートワイン「モンテフィアスコーネ」をとりだすコロンボに、エイドリアンは「実によく勉強されましたな、警部」(You've learned very well, lieutenant.)。「ありがとう。過分のお褒めのことばに感謝します」(Thank you, sir. That's the nicest thing that

anybody's ever said to me.) とコロombo。二人は「別れのワイン」を楽しみます。

## エルザの愛に訴える

さて、オルトルートの策略は、「身元を明かさないうろエングリンこそ、エルザをだまして、この公国とエルザを奪おうとする悪魔なのだ」とエルザに告げることです。「私は未来を見ることが出来るのです。あなたに警告します。幸福 (Glück) をあまりに信じて、不幸 (Unheil) があなたを覆うであろうことを。魔力で現われた人が、いつか、いなくなってしまうなければいいのですが ...」。この言葉に、エルザは一気に不安になります。それで、結婚式の夜、ついに、ろエングリンに「あなたのお名前をいって下さい」といいはなちます。さあ、大変なことになりました。オルトルートの呪いが効いたのです。エルザに「禁忌の掟」を破らせたのは、ろエングリンに対する愛です。エルザの愛が、あまりにも強すぎたのです。これは、オルフェオでも、与ひょうでも、同じです。愛も強すぎれば、自らの愛を破壊するのです。

これこそ、「絶対矛盾の自己同一」です。

都築正道